

# 須永平太郎の卒業（進級）証書に関する考察

——明治初年の足利小学校の状況——

麻生千明

足利工業大学非常勤講師

Study about Heitarou Sunaga's Certificates of Graduation of a Class (Grade) of Ashikaga Elementary School in the Early Years of Meiji-Era

Chiaki ASOU

## Abstract

Heitarou Sunaga made efforts to publish local newspapers ("Ashikaga Sinpou" etc.) in Tochigi district. He entered and learned at Ashikaga elementary school in early years of Meiji-era. His certificates of graduation of class (grade) shows real states of examination system and real condition of Ashikaga elementary school in those days.

keyword: Certificate of Graduation of class, Ashikaga elementary school, early Meiji era

## はじめに

私は今まで足利市の木村宜礼家および石関けい氏の明治前半期の卒業証書（「進級証書」）を資料に2本の論文をまとめた。<sup>(1)</sup>その後、足利市通町在住の須永家（当主・須永和夫氏）のご先祖の、以下の卒業証書をお借りすることができた。

- ・須永廣吉氏の長男平太郎の卒業証書等 6枚  
(明治7年～8年)
- ・二女ヨシの卒業証書等 16枚  
(明治14年～22年)
- ・五男政五郎の卒業証書等 10枚  
(明治15年～22年)
- ・須永平太郎の長女ハツの卒業証書等 8枚  
(明治29年～37年)

上記の卒業証書は明治期全般にわたっており、明治期の学校制度・進級制度の変遷について考察する貴重な資料である。上記のうち本稿は、紙数の関係で須永廣吉の長男、平太郎の卒業証書について考察することにする。

## 1. 須永平太郎のプロフィール——地元新聞（足利新聞、下野新聞等）の発行に尽力——

須永平太郎は、1861（文久元）年11月12日、須永廣吉の長男として足利市通町三丁目に生まれた。足尾の鉍毒問題に取り組んだ須永金三郎の兄にあたる。平太郎の父、廣吉は地元の南画家、田崎草雲とも親交があり、平太郎の端午の節句には草雲が描いた幟を立てて祝ったといわれている。

平太郎は1873（明治6）年に開校直後の足利小学校（旧東小学校）に入学、卒業後は家業の織物業を継ぐ。1882（明治15）年には小俣村の木村半兵衛と協力して足利の文化と産業の振興をはかる目的で郷土の新聞「足利新報」を発行、同年に足利町の町会議員、その後足利郡会議員を務めるなど郷土の発展にも尽力した。ところで発行当初の「足利新聞」はあまり振るわず、その後、栃木町の「栃木新聞」と合体して「栃木新聞」として再活動、その後、県庁が栃木から宇都宮に移ったのを契機に宇都宮に進出、

1884（明治17）年、宇都宮で発行されていた「下野旭新聞」と合体して「下野新聞」と名前を変えて第一号を発行した。また1909（明治42）年には足利郡立高等女学校（現在の足利女子高校）の開校など教育面でも尽力した。1923（大正12）年没<sup>②</sup>

このように平太郎は、郷土の新聞発行など、主としてジャーナリズムの世界で活躍したが、現在の足利女子高の創設など教育面においても尽力した。

ところで平太郎は、開校直後の足利小学校に入学、数枚の卒業証書（進級証書）を授与されているが、それは当時の進級試験制度や創立当初の足利小学校の状況等を伺い知ることのできる貴重な資料である。

## 2. 開校直後の足利小学校の状況

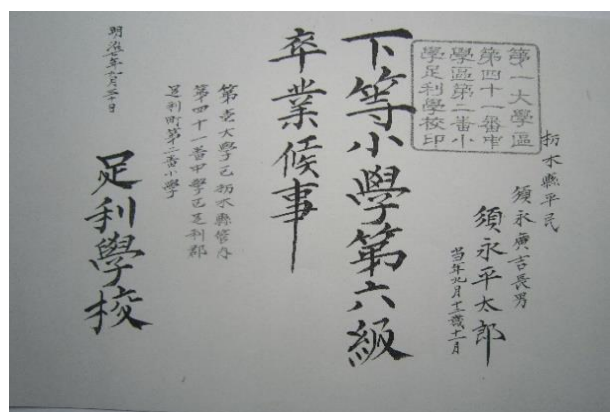
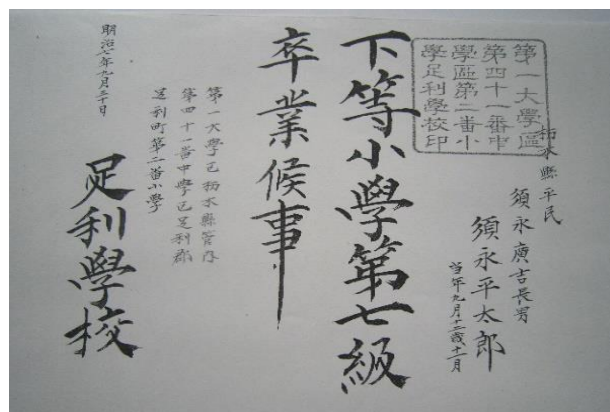
平太郎が入学した足利小学校は、「わが国最古の学校」と喧伝され、特に戦国期には儒学のみならず医学、兵学、天文学、易学など幅広く教授したことから「中世における総合大学」とも称され、日本遺産にも認定された歴史的に有名な足利学校の跡地に1873（明治6）年6月7日に開校され、「足利学校」と称した。なお本校開校と同時に三丁目西林院と七丁目三宝院に、やや遅れて本城心通院に分校が置かれた。1875（明治8）年には間口13間、奥行7間の和様折衷の校舎を新築。1882（明治15）年には分校三舎を廃して足利小学西校を西宮町高德寺に設立し、本校は「足利小学東校」と改称された。<sup>③</sup>

すなわち同校は、「足利学校」と称され、平太郎の卒業証書にも「足利學校」と表記されている。また、当時、学区取締を務めた木村半兵衛の日記には「足利町学校」と記されている。なお本稿では、歴史的に有名な「足利学校」と混同しないように、「足利小学校」と表記することにする。

ところで平太郎の父、須永廣吉は、足利小学校の開校に際し金百円を寄付<sup>④</sup>、さらに1874（明治7）年9月には初ヶ谷長太郎と共に足利小学校が所在する五小区の学校周旋人に推薦、任命されている。<sup>⑤</sup> 学校周旋人とは、学区取締に協力して学校の設立、運営のために寄付金の徴収や児童の就学奨励など学校教育の振興のために協力した人たちであった。

このように平太郎の父、廣吉も足利小学校の設立

や教育に大いに尽力、貢献した。同校に入学した平太郎は、次に掲げたように1874（明治7）年9月30日付で下等小学七級と六級の卒業証書を授与されている。「学制」期の小学校制度は下等小学8級（4年）・上等小学8級（4年）から成っており、入学後、最初は下等八級の証書が授与されるはずであるが、お預かりした資料中には八級の証書はなかった。



卒業証書も、その後は「証書」ないし「卒業證書」等のタイトルが付され、カラーの文様の縁取りがなされるなど立派になっていくが、明治初年の証書にはタイトルはなかった。そして「栃木縣平民」と記したあと保護者氏名、続柄、本人氏名、年齢が記されている。また小学校の入学年齢（学齢）は6～7歳であったが、平太郎は「十二歳十一月」と、かなり高い年齢であった。学校が開校したばかりの明治初年は、全般的に就学児童の年齢は高く、小俣学校でも八・七級（1年生）で10歳以上が多かった。

証書の文面は「下等小學第七（六）級卒業候事」となっており、授与主体は「足利學校」と学校名になっている。また証書の上方には学区番号と学校名を記した校印が押されている。

平太郎のこの七級と六級の卒業証書は、授与日が

同日であるから、複数の等級を同時に合格する、いわゆる「飛び級」であった。「飛び級」は、「学制」期の文明開化、知育重視の方針を反映するものであるとともに、進級試験制度がまだ十分に整備されておらず、試験実施の草創期であった状況をも反映していたといえよう。

### 3. 明治7年は進級試験制度実施の草創期

1872(明治5)年の「学制」頒布後間もない当時は、栃木県においては寺院などを仮校舎に学校開校が相次ぎ、師範学校を卒業した教員の派出により学校教育が開始され始めた草創期で、就学児童も少なく、進級試験の実施方法も未整備であった。1874(明治7)年10月刊の金子尚政著『小学試験法』の「序」に、当時、教則や書籍器具は徐々に整備されつつあったが、「授業法ニ至リテハー二ノ著述アリト雖ドモ未ダソノ備ハルヲ見ズ」<sup>(6)</sup>、そして「試験法ニ至リテハーモ其類ヲ見ズ。且ツ方今ノ学校ノ多キ試験法ノ一定セザル殊ニ甚シトス」と記述されている。<sup>(6)</sup>

当時、足利地方の学区取締を務めた木村半兵衛の1874年(明治7)年の日誌(『学務雑誌』)に、6月6日、学区取締会議の際、県よりの口達のなかに「一各小学校進級試験方法不日一定之上可相達候条為心得相送候事」<sup>(7)</sup>と、進級試験方法を一定すべく近日中に布達が出されることが記され、欄外に「○方今既ニ進歩スル生徒ハ仮免許状ヲ以可昇級」<sup>(7)</sup>と記されている。すなわち進級に値する生徒には「仮免許状」を授与し進級を認めるとある。したがって平太郎には、八級の「仮免許状」(仮の卒業証書)が授与された可能性はある。

上記口達に「近日中」とあったように、6日後の6月12日に県として「小学生徒進級試業規則」が制定されている。その骨子は、進級試験に際して県学務掛(もしくは督業官)および学区取締は臨席すること、進級試験を実施する場合は試験の期日、受験者名簿を県に届け出ること、試験当日は父兄親戚等の参観も申し出のうえ許可されること、試験合格者には卒業証書を授与すること、成績抜群の者には褒賞を賜与すること、などが規定されている。<sup>(8)</sup>

なお試験に際して県学事掛や学区取締は「臨席」

とあったが、実際には試験官として試験の実施にあっていたようである。学区取締の任務等を規定した「学区取締規則」のなかに「六ヶ月毎生徒試業ノ節ハ立合可致事」<sup>(9)</sup>とある。その試験方法も、個別に教科書の講読や口頭試問を行ったりするのであるから、かなりの時間と労力を要するものであった。

明治初年から1877(明治10)年半まで学区取締を務めた木村半兵衛の日誌にも、年に2シーズンの進級試験実施期間中は、担当区内の各学校を巡回し、試験を実施した記述が随所にみられる。試験期間中は各学校で連日試験が続き、一日に複数校を掛け持ちし、夜は学校世話係宅や学校等に宿泊するなど、かなりの激務であったことがわかる。<sup>(10)</sup>

1874(明治7)年は、進級試験実施の草創期であったが、同年6月に「小学生徒進級試業規則」が制定され、以後、同「規則」に従って進級試験が本格的に実施されるようになる。『文部省第三年報』(明治8年)の「督学局年報」中、栃木県に関して「明治七年六月下等小学卒業定期初回ノ試験ヲ施行セシ以来大ニ生徒ノ勉強心ヲ発生シ定期第二回ノ試業ニ至テハ十年未滿ノ幼童ニシテ二期ノ課程ヲ一期ニ習熟シ一回ノ試験ニ二級ヲ卒業スルモノアリ」<sup>(11)</sup>とある。すなわち1874(明治7)年6月に「第一回」の進級試験が実施され、「第二回」目が同年9月に実施されたようである。平太郎はこの「第二回」目の進級試験を受験し、9月30日付で「卒業証書」を授与されたものと思われる。実際に足利小学校では9月22日から10日間、進級試験が実施されている。

### 4. 足利小学校では明治7年9月22日～10月1日に進級試験を実施

進級試験の実施にあたり学区取締は受験者数等を県に報告する任務があったが、1874(明治7)年の木村の日誌(『学務雑誌』)に「○第九月六日届 第十大区一ノ小区ハ七小区ニ至 本分学校生徒 下等小学八級并七級満期熟達之者共凡六百名」<sup>(12)</sup>と記されている。これは同日開催の学区取締会議に向けてのメモであるが、担当区内の各学校の八級・七級の進級試験受験に値する「満期熟達之者」が「凡六百名」と記されている。

そして4日後の9月10日付で「進級試験御出役願」と題し、学区取締足立至徳と木村半兵衛の連名で県令鍋島公宛に書類を提出、その控えが記載されているが、そこには担当区内の学校ごとの受験者数が記されている。まず冒頭に「足利郡足利町 第貳番小学 足利學校 生徒百八十人」<sup>(12)</sup>とあり、足利小学校の受験者数は180人と断然トップであった。以下、同様の形式で学校ごとの受験者数が記されている。学校ごとの受験者数を抜記すると、敬業学校（田島村）150人、有道舎（駒場村）130人、五十部学校30人、小俣学校60人、立教舎（八幡村）41人、就新舎（八木宿）30人、鼎立舎（縣村）22人、洩垂学校14人、立正舎（加子村）80人、共励学校（北猿田村）55人で、3校が百名を超えているが、それ以外は2桁であった。そして「右者下等小学第八級及第七級満期熟達之者共ニ付来ル廿二日ヨリ進級試験仕度候間此段御届申上候以上」<sup>(13)</sup>と、9月22日より進級試験を実施したい旨、県に願い出ている。その願い出通り、進級試験は最初に足利小学校において9月22日から10月1日までの10日間実施されている。木村の日記に次の記録がある。

九月廿二日足利学校下等小学第八級試験ヲ致ス学務御掛原少属殿御出役 木村 足立 臨席ス  
同 廿七日ニ至終ル 八級生徒百六拾九人 内八名落第  
同 廿八日ヨリ十月一日至 七級 七十四人 内式名落第 六級 八人  
総計 貳百五十一人 内十式名落第<sup>(13)</sup>

すなわち9月22日から27日までの最初の6日間は八級生徒169人、28日から10月1日までの4日間は七級生徒74人と六級生徒8人に対する試験が実施されている。各級の受験者総計は251人とある。先述の「出役願」には足利小学校の受験者数は180人と報告されていたが、前掲の「督学局年報」に、「第二回」目の進級試験は「二期ノ課程ヲ一期ニ習熟シ一回ノ試験ニ二級ヲ卒業スルモノアリ」と報じられていたように、同一生徒が複数等級を受験するケースが多かったようで、251人というのは、各級

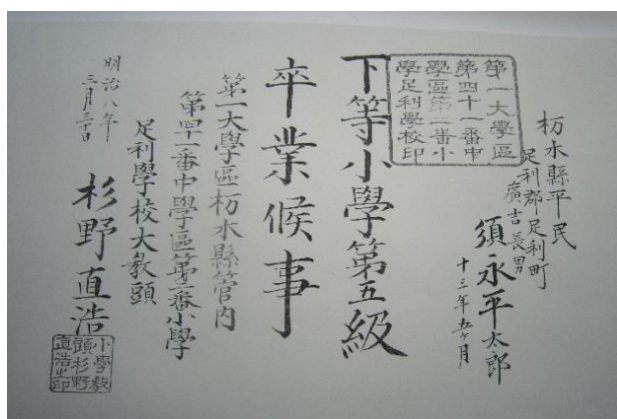
の受験者の延べ人数であろう。

足利小学校の受験者は、その大部分が八級および七級で、六級の受験者はわずか8名であった。平太郎はその8名のうちの一人で、今回の試験において七級と六級の「飛び級」を果たした希少なケースであった。足利小学校の受験者総数251人のうち、落第者は全体で12人と僅少であった。（及第率95.2%）学校によって及第率はかなりの格差があるが、足利小学校の生徒は総じて優秀だったといえよう。

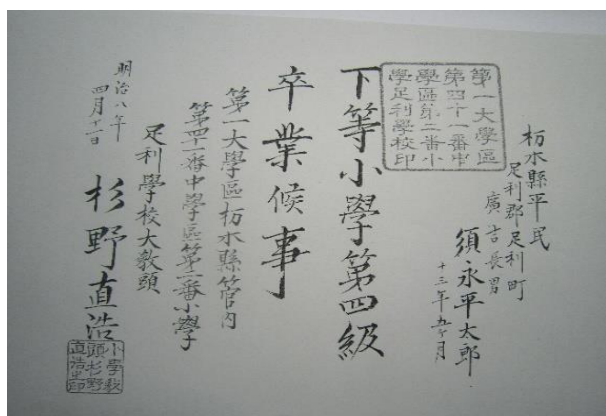
1年後の1875（明治8）年10月に足利小学校の大試験（卒業試験）を視察した中督学、畠山義成は、同校での試験の様相について報告書に記している。それによると畠山は15、16の2日間、第六級から第三級までの各一組の試験を参観、その様子について「生徒静肅坐作規ヲ守リ進退節ニ応シ又雑沓ノ弊ナシ」<sup>(14)</sup>、「現場ノ景況ヲ熟視スルニ応答明朗迅速ニシテ講読質問更ニ凝滞ナク毎級甚タ冗長ナル試業ヲ施セシガ半失或ハ一失ノ点ヲ得タルモノ僅々二三名ニ過キス蓋シ教員平素教授ノ緻密ニシテ授業ノ法宜キヲ得ルニ非スハ安ソ此ノ如ク詳悉明弁ナルヲ得ンヤ」<sup>(14)</sup>と報じている。同校生徒の受験態度の良好み、成績の優秀性、またその要因として同校教員の平素授業の緻密さなど、好評している。

## 5. 明治7年中の足利小学校の教頭（校長）のめまぐるしい交代

平太郎は七級、六級の卒業証書に続いて、下に掲げたように、半年後の（明治8）年3月30日付で五級の卒業証書を授与されている。



なおそれから約10日後の4月11日付で次のように四級の卒業証書を授与されている。



授与日は同日ではないが、わずか10日の間隔での授与であるから、これも「飛び級」とみなせよう。

ところで前回の証書の授与主体は「足利学校」と学校名であったが、今回は「足利学校大教頭 杉野直浩」と教頭（現在の校長）名になっている。前に考察した木村啓治郎の場合、1875（明治8）年に月谷学校から授与された八級の卒業証書以降、一級に至るまで証書の授与主体はすべて授与時における教頭名であった。（注(1)掲出拙稿①）

卒業証書の授与主体の記述は、時期により、また県や地域、学校によって同じではないが、平太郎の場合、足利小学校から1875（明治7）年に授与された証書の授与主体は学校名になっており、翌1875（明治8）には教頭名になった（変化した）背景事情として、同校では開校1年後の1875（明治7）年中に短期間で教頭が3人も交代するという一種異常な状況があった。次は『近代足利市史 第四巻 史料編』所収の「学校沿革調」の足利小学校に関する記述である。

明治六年七月三十日開業助教之内ニテ教頭代理井戸謙 野州梁田郡渋垂村平民 其式ヲ行ヒ学務掛 藤山治朗之ヲ鑑ス先夫迄古来ヨリ有来候足利旧学校ヲ転用ス其後新築 明治八年 渋井諸（佑カ）賢 足利郡足利町栃木県士族 事務掛タリ後明治七年七月二十五日依病氣願之上教頭代理井戸謙免職ニ相成同年八月七日中教頭古畑小弥太 上野国邑楽郡館林栃木県士族 之二代ル後十月十八日古畑小弥太佐野植野学校へ転用ニ相成同日大教頭杉野直浩 岐

#### 阜県士族 之二代ル<sup>(15)</sup>

すなわち足利小学校は1873（明治6）年7月30日に井戸謙を教頭代理に開業後、井戸、古畑、杉野と3人交代しているのである。これを木村半兵衛の日誌等の資料と照合すると、より詳細な事実が明らかになる。まず木村の1873（明治6）年の日誌（『学区日誌』）に「七月廿八日足利学校開校仮教頭井戸」<sup>(16)</sup>とある。厳密にいうと「沿革調」の記述と日付が異なるが、あるいは「開校日」と「開業日」の相違なのかも知れない。近代学校が創設された明治初年は、仮校舎の決定、教員の派出、開校式の挙行等、一体何をもって開校日とするかは曖昧さがある。

また前掲「沿革調」には、井戸は1年後の1874（明治7）年7月25日、「病氣」により依願免職と記されているが、その背景には同校におけるトラブルがあったようである。木村の同年の日誌（『学務雑誌』）に、5月の出来事に関する次の記述がある。

○五月十八日出發足利町学校教頭井戸謙ト助教数名之議云々ヲ生シ何分一和不致ニ付足立氏周旋人丸山治平初谷長太郎同道学校へ参集井戸病氣ト唱籠居外助教中村啓三郎湯澤謙吉始外六名へ面會談示ニ及處表ニハ更ニ不都合之筋モ論述ナク何分助教無人教授行届兼候ニ付両三名増員有之度唱之其外異論ナシ足立氏モ憤論ニ及ブ後日改革ノ見込ヲ以一同其場引揚ル<sup>(17)</sup>

すなわち当時、足利小学校では教員の補充をめぐって紛擾、地元の学校周旋人等も参集して談判がおこなわれたが収拾がつかなかったようである。井戸の依願免職の背景には、そんな出来事が関係していたのである。木村の日誌（『学務雑誌』）には、7月付、次のような井戸本人の「免職願」が掲載されている。

#### 免職願

性質多病累弱之處當今尚又致膨張實以職務難相勤依之免職相願專治療仕度此段奉願上候也

第十大區五小區

足利学校

教頭

明治七年七月

井戸謙

学務御掛<sup>(18)</sup>

この井戸の「免職願」に対して県からは7月25日付けで「免職之儀者難聞届足利学校在勤之義者差許免候事」<sup>(18)</sup>との「御指令」が出されている。「足利学校」(足利小学校)の在勤は免除するが「免職」すなわち教職を辞することは許可しないということであろうか。足利小学校を辞したあと井戸は、8月2日には小俣学校の「寄宿留学生」となり、8月17日付で葉鹿小学校の教頭に任命されている。木村の日記に次のような辞令が掲載されている。

中教頭

井戸謙

右者其擔当区内足利郡葉鹿村へ在勤相達候条為心得此旨相達候也

第七年八月十七日 学務掛 印<sup>(18)</sup>

そして「八月十九日午前六時葉鹿村学校へ井戸謙教頭トシテ派出」<sup>(18)</sup>と記されている。

また前掲「沿革調」には、井戸の転出後8月7日に古畑小弥太が二代目教頭として赴任とあるが、実際には8月中は教頭不在だったようである。木村の日記に、8月27日の日付で「足利町学校不振其区正副へ尋問書」と題する資料が掲載されている。それは当時の足利小学校の不振を打開すべく、学区の正副戸長に対する「尋問」(要望)を記したものである。箇条書きで列記されたなかに、「当時教頭缺員ス至急教頭雇入無之テハ自然教授方法モ區々不都合ヲ生ズベシ」<sup>(19)</sup>とあった。すなわち教頭の欠員を早急に補充するよう提言されているのである。

その他、校舎も狭隘で入学志願者の収容にも事欠く状態なので「因茲諸君一致協力不日ニ本分校舎新築アランハ必セリ」<sup>(19)</sup>と校舎の新築も要望している。なお校舎については「頃日新築着手ノ説ヲ聞キ雀躍ニ不堪」<sup>(19)</sup>とあるように、近く校舎新築に着手する動きがあったようであるが、前述したように1875

(明治8)年に立派な校舎が新築されたのである。

ところで古畑の教頭着任について、木村の日記には次のような辞令が記載されている。

桐生小学中教頭

古畑<sup>ママ</sup>古弥太

右足利小学校在勤相達候条此旨為心得相達候也

明治七年九月五日

学務係<sup>(20)</sup>

すなわち当時、桐生小学の中教頭であった古畑を足利小学校の教頭に任命した日付は「九月五日」と記されている。木村半兵衛関係文書中にも1874(明治7)年9月5日付〔古畑古弥太を足利小学校勤務となすこと〕(趣旨)<sup>(21)</sup>との達書がある。

前述したように木村は、学区取締の任務として9月6日に進級試験実施に際しての「出役願」を県に提出していたが、恐らく書類提出に際して教頭不在では不都合ということで、それに何とか間に合わせたの任命辞令であったと推察される。したがって9月22日から10月1日までの同校での進級試験実施期間中は、古畑が教頭として在任していたのであるが、前掲の「沿革調」によると、古畑は進級試験終了後間もない10月18日に佐野の植野学校に転出している。すなわち古畑が足利小学校の二代目教頭としての在任していたのは、辞令上では9月5日から10月18日までのわずか1ヶ月半であった。これでは到底、同校の教頭として腰を落ち着けて勤務する状況であったとは言い難いであろう。

## 6. 第三任教頭、杉野直浩の採用時の一悶着

また前掲の「沿革調」によると古畑の後任として杉野直浩が第三任教頭として着任した。木村の日記には次のような杉野の辞令が記載されている。

○ 大教頭上給

岐阜縣貫属士族 杉野直浩

右者第十大區五小区足利町学校在勤相達候条為心得此旨相達候也

第七年十月十五日

学務掛 印<sup>(22)</sup>

木村半兵衛関係文書中にも、1874（明治7）年10月15日付〔大教頭上給杉野直浩を足利町学校在勤とすること〕（趣旨）<sup>(23)</sup>との県の達書がある。

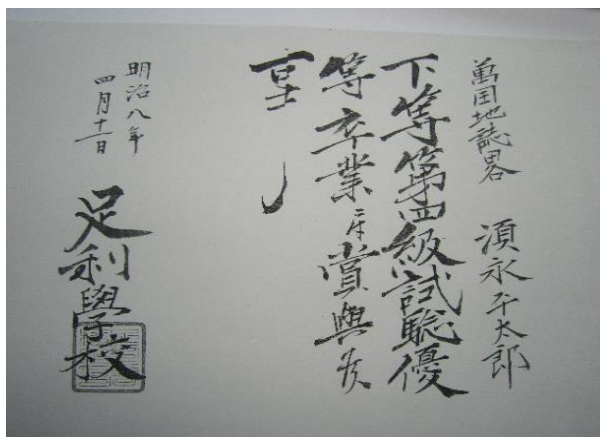
ところで杉野の教頭採用時には一悶着があったようである。郷土の新聞『夕刊足利日報』に「郷土漫談 大教頭杉野先生」との見出しで記事が掲載されている。それによると1874（明治7）年、足利出身の金井知義が、東京師範の出身で当時北足立郡西新井外八箇村の小学校を主催していた杉野先生に交渉、東京府とも交渉がまとまり、足利町役場から栃木県庁に具申、足利小学校の教頭に着任する手筈となった。本人も足利に来たが、4、5日経っても辞令が出ない。埒があかないので本人が直接県庁に掛け合いに出かけたが、月給25円（上給）での採用という条件であるが、県下には月給15円以上の者は一人もおらず、とても月給25円という破格の辞令は出せないで延引しているということであった。それなら東京に戻すよう取り計らってくれと頼んだが、そんな一悶着の末、「大教頭」としての辞令は一応出すが、俸給は町役場との話し合いで、ということで何とか決着したという次第であった。<sup>(24)</sup>

また杉野は、足利への着任に際して、歴史的に有名な「足利学校」が所在した土地柄ゆえ、さぞかし立派な校舎と想像していたが、いざ来てみると「土手の際にウネウネとした長屋然たる一棟の古建物」<sup>(24)</sup>で驚いたという。しかし着任1年後の1875（明治8）年には和洋折衷、二階建ての立派な校舎を新築、足利の住民の教育への意気込みはさすがに素晴らしいと記事子は賛嘆している。

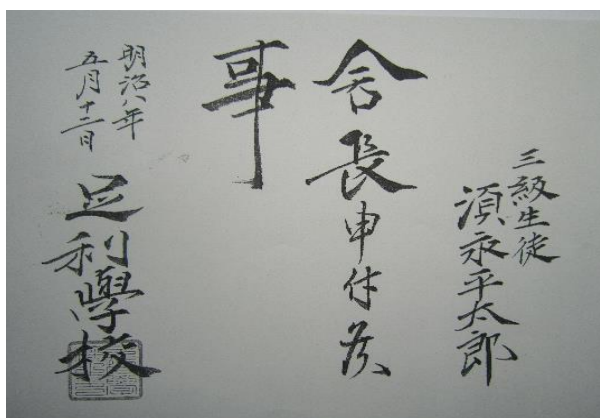
杉野は足利小学校の第三任教頭に着任後、同校教頭としてのみならず足利地方の教育界においても重責を果たしていくことになる。

ところで平太郎は、四級の進級試験では成績優秀だったようで次のような褒賞証書も授与されている。褒賞品として教科書が授与されるケースが多かった。平太郎の場合は『萬国地誌略』という教科書を授与されている。同書は、アメリカ人コルトンの『学校地誌』およびアメリカ人ミッチェルの『近世万国地誌略』の要点を訳し、またイギリス人ゴールドスミスの『地誌』および『聯邦誌略』などによって編纂

したもので、「学制」期の文明開化期にふさわしい、世界に目を向ける地理教科書であった。<sup>(25)</sup>



このように優秀な成績で四級の進級試験に合格した平太郎は、下に示したように1875（明治8）年5月12日付で「舎長」に任命されている。



「舎長」とは現在の学級長あるいは生徒会長に相当するものと思われるが、平太郎が極めて優秀かつ信望の厚い生徒だった証左といえよう。なおお預りした資料中には平太郎の三級以上の卒業証書はなかったが、平太郎はその後、三級、二級、一級にまで進級し下等小学を卒業したと思われる。

## むすび

以上、本稿は須永廣吉の長男、平太郎の卒業証書について考察した。特徴のひとつとして「飛び級」が多かったことが指摘できる。「飛び級」や成績優秀者への褒賞制度などは、「学制」期の知育重視の方針を反映した進級試験制度の特徴であった。

ところで飛び級は「連級試験」とも称されたが、一面、教師の情実が絡むなど弊害面も顕著になるにつれ、次第に廃止の方針がとられるようになる。1877（明治10）年5月に栃木県第五課より、次のよ

うな指令が出されている。

各校生徒定期試験之儀連級試業ハ前期差懸リ疾病其外止ヲ得サル事故アルニ非ザレハ不相成義ニ候処無謂連級試業ヲ致候者往々有之哉之赴右者不都合ニ付自今一時ニ数級試業不致様可取計尤特抜優等之者ニテ一期六ヶ月内ニ再度進級可致生徒有之節者其事由申出臨時試業候可致特ニ一級以上ニ到リテハ学科相当精密ニ涉全級温習モ有之義ニ付右様之義無之様注意可有之候也  
明治十年一月四日 栃木県第五課<sup>(26)</sup>

すなわち疾病等、やむを得ない事情で受験できなかった場合を除いて「連級試験」は原則、実施しないよう指令されているのである。ただし「特抜優等之者」に対しては半年を経過せずに「臨時試業」を実施することは差支えないとしている。

以上、平太郎の卒業証書は、進級試験制度がようやく整のい、本格的に実施される草創期、そして開校後間もない明治初年の足利小学校の状況等をうかがい知ることのできる貴重な資料であった。

## 注

- (1) 拙稿①「明治前半期の卒業証書にみる学校制度・進級制度の考察——その一・木村宜礼家の資料を中心に——」『足利工業大学 東洋文化 第33号』平成26年1月、拙稿②「同上——その二・石関けいの「教育令」期の「卒業証書」を主資料に——」同上誌 第34号 平成27年1月
- (2) [http://kyouiku.ash-s.ed.jp/senjin/h\\_sunaga.html](http://kyouiku.ash-s.ed.jp/senjin/h_sunaga.html)
- (3) 『栃木県教育史 第三巻』栃木県教育史編纂会 昭和32年 588頁
- (4) 『近代足利市史 第四巻 史料編』足利市史編さん委員会 昭和50年 733頁。当時の寄付金は「据置寄附」(のちに「寄附利子」)と称して、本人に寄付金額を貸し付けたことにして、毎年1割の利子分を寄付するというやり方であった。
- (5) 『足利市歴史研究紀要第一集 三代目 木村半兵衛の日誌 翻刻と解説』足利市教育委員会 68頁。

同書には木村半兵衛の明治6年から9年までの4年分の日誌の翻刻と解説が収録されている。

- (6) 入江信三良「明治初期における栃木県の初等教育について」『宇都宮大学学芸学部研究論集 第六巻 第一部』昭和31年 96頁
- (7) 注(5)掲出書 48頁
- (8) 『栃木県史 史料編 近現代八』栃木県史編さん委員会 昭和54年 22頁
- (9) 同上書 46頁
- (10) 拙稿①「学区取締木村半兵衛の日誌にみる明治初期の足利地方における進級試験の実施状況——その一・明治六年と七年の日誌を資料として——」『足利工業大学 東洋文化 第30号』平成23年、拙稿②「同上——その二・明治八年の日誌(『明治八年一月ヨリ同 十二月廿一日ニ至 雑記』)を資料に——」同上誌 第31号 平成24年、拙稿③「同上——その三・明治九年と一〇年の日誌を資料に——」同上誌 第32号 平成25年
- (11) 『文部省第三年報・第一冊』「督学局年報 一」192頁
- (12) 注(5)掲出書 61頁
- (13) 同上書 67~69頁
- (14) 注(11)掲出書 42頁
- (15) 注(4)掲出書 753頁
- (16) 注(5)掲出書 24頁
- (17) 同上書 45頁
- (18) 同上書 57~59頁
- (19) 同上書 60頁
- (20) 同上書 68~69頁
- (21) 『足利市史料所在目録 第1集 木村半兵衛家文書』足利市教育委員会 平成17年 50頁
- (22) 注(5)掲出書 72頁
- (23) 注(21)掲出書 50頁
- (24) 「郷土漫談 宇松庵 大教頭杉野直浩先生」『夕刊足利日報』昭和5年9月11日
- (25) 唐澤富太郎編『教育博物館 解説』ぎょうせい 昭和52年 311頁
- (26) 注(3)掲出書 99~100頁